

ビノールトさん、生き  
返る

ココブードル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

グリードアイランド編でゴンとキラアを苦しめたビノールトさん。ゴンによった改心したビノールトさんであったが自首する前に、死亡。

と思ったら生まれ変わった。

そので新しく生を受けたビノールトさんは夢であった全うな暮らしをするためにハインター試験を受ける。

そこには見たことのある子供達が……

# 目次

ビノールト死す

死にゆく賞金首×無念を残して

1

HUNTER試験編

旅立つ少年×安寧を求めて | 4

持久力×試験開始 | 9

トラウマ×ミス×ラッキー | 20

ニセモノ×タタカイ×シケンカン?

27

ニジシケン×タマゴ×ネテロ | 33

ゲーム×ホンキ×カッタ? | 40



## ビノールト死す

## 死にゆく賞金首×無念を残して

「もういい、殺せ」

「なんで、殺すわけないじゃん。だって俺たちおかげですごい上達したもん…。ありがとうビノールトさん。でも聞かせて何でこんな悪いことをしてきたの」

なんだこのガキの目、一点の曇りがねえ

「いいだろお、こたえてやるよお…。俺は酷いスラム街に生まれた。俺だってまともに生きたかった…。しかし世間が許してはくれなかった…。それだけさ…。1つお前に忠告しといてやる…。ここには俺よりやばいやつが沢山いる。気をつけろよ」

なんとも純粋なやつだぜ…。昔の俺そっくりだな。だがそれが危ういな…。

「うん。分かった気を付けるよ」

「ここをでたら自首する、じゃあな！」

「バイバーイ」

さて大分歩いたか。もうすぐマサドラなはず。着いたら離脱《リープ》を探すとする

か。しかし、傷がいたむなあ…。特にあのロリババアとゴンから受けたパンチは痛ええ！

ん？ おいおいついてねえ！こんなところに川かよ。普段の俺なら飛びこせるが今の俺の体調では難しいなあ。さてどうするか…

「おい、大丈夫か？手を貸そうか」

後ろを振り返ると優しそうなひよろ長いメガネを掛けた男がいた。

「ああー、少し怪我をしていてな。手を貸してくれると助かる。」

「いいぜほら捕まりな」

「ありがとよ」

手を借り川を渡ろうとしたところでメガネの男、ゲンスルーは言う

「しかし、おまえボマー にやられたのか？」

「いんやあ、ちげえ！ちよつとした強いガキにあつてな」

「そうかでもボマー には気をつけろよ… といつても今死ぬんだがな！一握りの火薬

《リトルフラワー》!!？」

「ギャー」

「ハツハハハツツ」

爆音が鳴ったと同時に俺は吹き飛ばされ、地面に倒れていた。

(クツツ、クソツ！あいつが噂に聞いていたボマー か… 全然動けねえ… クソツ万全の状況なら動けたが今の調子じゃあ立ち上がれる気がしねえ… ゴンに気をつけると言った俺がこの様か…)

「なんだまだ生きてたのか… といつても次で死ぬな。最後に言い残すことはあるか？  
聞いてやるよ」

「ああん、なんもねえーよさつさと殺せ」

(やつとこれから新しい人生を送ると思っただらこれかよ。おいゴンこいつにはきをつけろ… よ)

「チツ、うざいな！さつさと死ぬ一握りの火薬」

閃光が走った時には、もう体の感覚が無くなるのを感じた。段々、寒くなるのを感じながら俺は死んだ。

目を開けるとよく分からん場所にいた。なんだ誰か助けてくれたのか？… よかった俺は生きてる。

「ん？」

体がからだがいさくなってるんだがあどゆことダァー

## HUNTER 試験編

### 旅立つ少年×安寧を求めて

○年×  
×月

12歳になった。この12年間、前の人生と違って平和としか言えなかった。痩せこけることもなく腹一杯、両親に食わしてもらった。近所の人たちも優しい。落し物を渡したら優しくお礼を言ってきた。何か気持ち良かった。

なんだよ、財布を拾ってあげたら蔑んだ目をよこしてぶん殴ってきたやつ……あのカップルしんじまえ。

そんなことより、名前が変わった。ビノールになった。両親はピノールと悩んでたみたいだが、ビノールになった。俺的には、ビノールトで慣れてたからあだ名みたいでビノールに決まったことが嬉しかった……。

俺には夢がある！ハンターになって金持ちになることである。まともに生きて楽しみたいなあ……。なんでハンターかって儲かるからだよなあ……。念も生まれた時から練習してきたからハンター試験なんて余裕だろ……。



10歳になったころ能力を覚えた……。切り裂き美容師以外にでだ……。だが、切り裂き美容師は使えた。えっ？愛用のハサミはどうしたって？

5歳になった頃、初めて両親が経営する理髪店にお邪魔した……。

そこで父が愛用しているハサミをみた。とてつもない運命を感じた。それは俺が昔使ってたハサミによく似たハサミであつたからだ……。

当然、くすねた。当たり前だ！

父は、愛用のハサミが無くなったことで探しまわっていた。父さんすまん……。このハサミは、ぼくの愛用のハサミにするよ！

そして10歳になったころ

父の愛用のハサミは俺の愛用のハサミになっていた。

切り裂き美容師が使えると思い、俺は自分の髪の毛を食べてみた。すると俺の肉体的情報が出るわ出るわ……。このデータを見ながら修行した。効率が良すぎて嬉し涙が出たぜ。

そんなある日、切り裂き美容師で念能力の有無が見れることに気づいた。前世では、そんなの見れなかつたから気づきもしなかつた。

そこで俺自身のデータを見ると念能力が切り裂き美容師ではなく無しとなっていた。

「んっどゆいことだ？」

俺は念を使えるから念能力はあるし、そして今現在も切り裂き美容師を使っている。考えた結果、ある結論に至った。俺は前世で切り裂き美容師に目覚めてから人の髪の毛を食ってきた。そして俺は、切り裂き美容師の能力がなくなると能力を読み取れる様になつたのでは…と…。

多分そういうことだと思いが実際、分からん…。だつて俺以上に髪の毛食つた奴いないだろうし…。

人の体を見ただけで「こいつ、できる」の上位互換と思つたらいいだろう。見る以上に髪の毛食ってるんだし、それくらいあつてもいいだろう…。

念能力がまだないと気づいた俺は念能力の作成に勤しんだ。

水見式なんかしなくても切り裂き美容師で系統が分かるからやってない。系統は、データを見る限り前世と同じく特質系であることがわかっていたのでそれに合う能力を考えた。

やつと今年になって、作り上げた能力は飲込む髪の毛の結晶《ドレインギフト》である。

この能力とは、人の髪の毛を食べることにより発動する。そして食べられた人の念能力又は才能を使う事ができる。しかし、効果は髪の毛を食べた量に依存する。拳一つ分で、1時間程である。そして、人の髪の毛のほぼ全部を食べると一生その能力を使うことができる。

(この能力が完全した時、俺は歓喜した。切り裂き美容師と制約がマッチしたことで一石二鳥となっからな)

さてそろそろ、ハンター試験に向かうとするか……。理髪店を経営してる。両親に会いに理髪店の戸を開けた。

「どうした、ビノール。何か用か？」

「あら、どうしたのかしら？」

父と母が理髪店の中にいた。前世と比べてとても優しく俺を慕ってくれる尊敬できる両親だ。

「ハンターになりたい!!? だから家を出たい。」

「何言ってるの!あなたは、まだ10歳よ!ハンターなんか無理よ」

「まあまあ母さん、元気があつていいじゃないか!私だつてハンターになりたかったが、才能が無かった。それに比べてビノールは力も強いし、判断力もある。試しに受けて見るのもいいんじゃないか？」

反対されると思っていた父からの了承。初めて父さんを崇めたいと思った。しかし、母さんがなあ……。:

「お父さんがそう言うんですたら……。ビノール……。今年受けて落ちたらこの理髪店を継ぎなさい。それが条件よ!いい?」

(まさかの、おっけーとは……)

「ありがとう、父さん、母さん！」

旅立ちの日になった。この家族ともしばらくお別れか……。

「それじゃあ行ってくるね……。」

「気をつけて行ってくるのよ」

「己の限界を見つけてこいよ！無理だったら帰ってこい…… 行ってらっしゃい」

「行ってきます！」

ビノールは家を出た。ハンター試験を受けるために……。

# 持久力×試験開始

「ウエツ… ハアツ、ハアツ….;」

(ナビゲーターめ… 道間違えてんじゃねえーよ!!?… 次会ったらブツコロしてやろーか…)

ビノールは内心毒づきながら高層ビルの隣にあるステーキ屋に入ってしまった。

「いらっしえーい！」

とてもシンプルな至って普通の定食屋さんである

「ご注文は？」

「ステーキ定食」

ツツ店主の驚いた顔が映る

「焼き方は？」

「弱火でじっくり」

(暗号ってこれであつてるよなあ？間違つてたら詰むんだが……)

「お客様さん、奥の部屋へどうぞ！」

(ウツシャー——)

奥の部屋(エレベーター)になっていて、下へ降りている)でステーキ定食を食べながら物思いにふけていた。

(ここ)まで大変だった……。ここに来る途中ナビゲータと名乗る奴を見つけたので有り難く着いていくと待つていたのは、人身売買の組織……。全員、ブツ殺してやったがな……。髪の毛も食つてみたが誰も念能力も才能もない雑魚……。

ゴンを見習つて少しは、人を信じてみようと思つたらこれだ……。ゴマー といい。今回といい……。もう人を信じるのは辞めようかな……。？

まあいい、なんとか道を間違えたが本物のナビゲータに会えたのは幸いだった。)

そうこうしている内に、目的の階に到着した。そこに待っていたのは、チンピラみたいな目をした奴らが沢山いた。

「ザワツ……ザワツ……なんだあのガキ、子どもの遊びじゃねえんだよ（ボソツ）」

（見られてるな……まあいい、雑魚はほつといて少し休憩するとするか……）

「よお……あんたで丁度400人目で400番だな……俺はトンパ！今年は16番さ  
!!?。」

「今年は？」

「ああ、新顔だね君……何しろ35回も受けてるからねえ！」

「35回も受けてるのか!？」

（ザコなのか？だが、35回も受けて死なずに受けてるのを考えたら注意しておくか）

「単なるベテランさ……分からないことがあつたら何でも聞いてくれ！」

「ああ……ありがとう。」

挨拶を交わした後、トンパは去っていった。

「チンツ」

先程、エレベーターから降りてきた所に3人組がおりてきた。

（んっ？あいつゴンじゃねえか…… あいつもこのハンター試験を受けるのか…… ギョンの感じをみる限り、同じ年らへんに生まれたらしいなあ俺は……

さてどうするか…… ギンと一緒に動くか……？でも俺のこと知らないだろうし……

よし、影ながら見学させてもらおうとするかあ……）

「ギヤアツツー」

（……なんだ？ ん☒、なんだアイツ…… あんなヤツ見たことがねえ……。なんて禍々しいオーラを纏っていやがる……。今のおれじゃあ勝てねえ……

関わりたくはねえが髪は食ってみてえ……。44番か覚えておくする



か……………)

トンパがゴン達と話している。

(なになに……、あの44番はヒソカつていうのか……。なるほど試験官は、毎年代わり、その試験官によって内容も変わるのか……。試験官が来たようだな!!?)

試験官が来たことで受験者の顔つきが変わった。それにより空気が重くなる。

「ただいまを持って受付時間を終了いたします。では、確認しますが、ハンター試験は大変、厳しいものであり運が悪かったり実力が乏しかったりするとケガをしたり、死んだりしてしまいます。それでも構わないという方のみ付いて来てください」

試験官はそう言い歩き出した。受験者は、みな了承したかのように試験官の後に続いた。ビノールもそれに続き歩き出した。

「承知しました。参加者404名で……………」

受験者は、試験官に続き暗く先が見えないトンネルを歩き始めた。これから始まるハンター試験を表すかのように……………

試験官は、歩き出した。受験者達はどこに連れていくのかを考えていた。

(どこにいくんだよ、はやく試験始めろよ……早くハンター試験合格して楽に暮らしたいだよお)

ビノールも内心毒づきながらも試験官に離れずついて

「ザワツザワツ」

「なんか早くなつてないか？」

辺りがざわめき出した頃、試験官が話す。

「申し遅れましたが私、一次試験担当のサトツと申します。これより皆様を二次試験会場へとご案内します。すでにお気づきの方もありません。2時試験会場までついてくること。これが一次試験です。」

（なんとまあ、持久力がテストとは………。しかし、何分走ることになるのやら……まあ念を伝える俺にとってはカモとしか言えないな………）

30分後

「いつまで歩くんだよ」

「ハアツ……ハツ……ツ」

（余裕、余裕！）

3時間後

（んっ？ゴン達が遅れてるな… ちよつと見に行くか… なるほどなあ、レオリオという奴がへバツてて足止めを食ってる感じか… いや、トンパがレオリオをどこかに連れていつてるな… ちよつと覗きにいくとするか…）

「さつ、ここでじつとしてるんだ… そうすればお前達は必ず脱落するゼエ…」

「なんだとおいつ！どういうことだあ！！？」

「おれさあ、ニツクネームがあるんだ… 自分でも結構気に入っててさあ、ルーキー潰しのトンパってなあー！」

「てめえ、なにしやがった…」

「直に分かるさ！じゃあなあ。」

（やつぱり、こうなったか… 嫌な予感当たるもんだな… ここでコイツは脱落してもらおうとするかあ… コソコソ動かれると邪魔だし）

「へッへッへッへえー… やつぱり新人を潰すのはたのしいなあー」

独り言を呟くトンパがそこにはいた。

「ねえねえ、試験官どこに向かったか分かる？」

(10歳らしい満面の笑みで声をかける)

「ああつ、おまえはビノールだったな…… おまえもはぐれたのか…… こつちに向かったと思うぜ…… ついてこいよ！」

(コイツも、脱落させてやるかあ…… どいつもコイツも…… ルーキは馬鹿ばかりだな…… さてこいつをどう脱落させグツツ…… なんだ☒)

トンパは地面に倒れ目に映ったのは左手を手刀に構えていたビノール、そして右手にはハサミをチヨキチヨキシ、ケモノみたいな笑みを浮かべていた。

(トンパは気絶したな…… 念なんかこめなくとも10年間鍛えてきた俺の純粹な力で倒せたな。といつても死なないよう調整したがなあ！)

さてとこいつはどうするか…… 殺す価値もないしこいつの能力だけでも頂くとする

か……。

（とりあえず、切り裂き美容師《シザーハンズ》……… ムシヤムシヤ、むっ…… 弱い弱すぎる…… 弱いぞトンパ……… さてとトンパの才能を頂くとするか……）

### 飲込む髪の毛の結晶《ドレインギフト》

気絶しているため髪を切っても気づかない……。ピノールはトンパの髪を全て切り取ると、全ての髪の毛を集めた。そして念の力を込めて圧縮するとそこには、小さい結晶玉と化した髪がそこにはあった。

（流石に、全部の髪の毛を食うのはしんどいからな…… 試しで成功したのが幸いな……。さてつ、トンパの才能は悪知恵か……… んー頭が賢くなるのは良いことだとポジティブに考えるところか……。なんだかんだ初めて使う能力だしどう変わったのか分からんな…… 一度確認してみるか）

ピノールは自分の髪の毛は少し切り、ムシヤムシヤと食べ出した。

（んんっ、データを見ると基礎能力とは別に才能と書かれた欄があることに気づいた。そこには、吸収されたトンパの才能《悪知恵》が書かれていた。なるほどな……時間があれば増やしていくとするか……しかし、労力がかかることを考えると弱いやつ髪の毛を食うのはやめとくとするか……）

さてと、ゴンの友達を助けにいくとするか……）

………  
……… ビノールは歩き出した。今の状況を見ていた闇の住人に気づか  
に………

## トラウマ×ミス×ラッキー

「ウウツ… すまないピエトロ…」

レオリオは悪夢にうなされていた。

惑わしスギのにおいとは、相手の1番触れられたくない過去の幻を見せて精神を破壊する危険物質である。レオリオは、助けられなかつた命を思い浮かべていた…

（んっ？このにおい… 惑わしスギの樹液のにおいか…？昔、殺した賞金首が使つてたなあ！鼻は閉じておくか…。）

「おい、大丈夫か？」

レオリオに声をかけるが、全然目を覚まさない。

（チツ！さてどうするか…？仕方がない… 荒療治でいくとするか…。）

ピノールはレオリオの頭をつかみ高速で揺らした。するとレオリオは目を覚まし、吐き出した。

「おえっ、おえ」

「目を覚ましたか？」



「あああん、つてトンパの野郎どこいきやがった？ぜつたいゆるせねえ」

「大丈夫か？倒れていたから手を貸したが……」

「ああ、ありがとよ、俺はレオリオつていうだ。よろしくな！そんなことより試験官を追いかけるとするかあ」

「とりあえず一度、もどるとするか。」

レオリオとビノールは、そう話しながら一度少し前まで戻ろうとしたとき

「レオリオく大丈夫？」

ゴンとキルアとクラピカの3人がこちらに向かって走ってきた。

（まずい、ここで鉢合わせするとは……レオリオとは適当に出会って助けた振りでもするか……）

「レオリオ、大丈夫か？ん、赤い髪の毛の坊やは誰だい？一緒に迷い込んだのか？」

「ああ、たまたま迷い込んだ所にこのお兄さんが倒れていたから助けていたんだよ」

「そうだったのか！ありがとう。仲間が世話になった」

「ありが……」

「違うね……偶然なんかじゃないんだろ？」

ゴンの言葉を遮るようにキルアが言葉を発した。

（んっ!!なぜばれた……。確かにこいつはガキの割に頭が冴えていたのは覚えている

が……)

「なぜだい、キルア。」

クラピカが、キルアに聞く。それに答えるかのようにキルアが口を開く。

「だつてさつきこいつ…、トンパつてやろう倒してるところオレみたし…、しかもこいつチョーツエー…。。そうそうこいつ髪の毛、くつてやがったぜ！あいつ丸坊主になつていやがったぜ…。。チョー笑える。」

その言葉を聞いたゴン達3人は、驚いた顔をし唾をのみこんだ。そしてクラピカが先陣を切り口を開いた。それに呼応するかのようにレオリオとゴンも口を開けた。

「色々ききたいことはあるが、どうして君はトンパを倒してたんだけ？」

「いや、それよりなんで髪の毛なんか食つていやがったんだ？」

「ねーねー、君なんていう名前なの？」

(あの場面を見られていたか…、これはキツイみすだなあ…、しかし、ゴンは相変わらず面白いやつだぜ。不審に思われている俺に名前をきくなんてなあ)

「えっ…とね。ぼくは、ビノールっていうんだ…ええつとね…、トンパがレオリオを毘にはめているのを見てゆるせなかつたんだ。だから後ろから首元にチョップを叩きこんだんだよ…、上手いこと決まってよかったよ…。」

どうして髪の毛を食つてたかつて？家が貧しい理髪店でね…、ごはんがないから落

ちてる髪の毛を食う生活をしてたらこの習慣がしみついちゃったんだ……」

（嘘が流れるようにでてくるぜえ。これはあのトンパの悪知恵がきいているのかもしれないなあ。）

「大変だったんだな……」

「ビノールっていうんだ、そうだったんだ……」

「ま、いいんじゃないか。それより早く試験官のところにいこうぜえ」

（恐ろしく早い手刀、俺でなきや見逃してた……なんにもんだこいつ？しかもこいつアニキと同じ匂いがすんだよなあ）

「いつけねえ、試験のこと忘れてた、急いで試験官のところに戻らないとー！」

「そんなことしなくてもあるぜ、一発逆転で先頭集団に追いつく方法が……！ゲームは単純じゃつまらないだろ。」

「どうやって?？」

「爆弾!!?……結構すごいやつ……」

「爆弾?？」

「吹き飛ばすのさ、この樹液だらけのトンネルを！」

（ホツツ……話しがそれで安心したぜ……。キルアが何か良からぬことを考えてるが今回は、便乗させてもらうか……）



サトツがゴン達を褒めていると、周りがぎわめき出した。

しかし、そこにトンパはいなかった……………。

(しかしまあ、あんな大量に爆弾を隠しもつてるとはキルアにはおそれいるなあ……さて、あとはのんびりに試験官についていくとするか……………)

サトツがラストスパートをかけ、受験者を落としかかった。しかし、あまり脱落者を出さずにトンネルを抜け出した……………。抜けた先には、広大な湿原が広がっていた。

「ヌメーレ湿原、通称サギシのめぐら…………… 2時試験会場はここを通っていかなければなりません…………… 人間を欺いて食料にしようとする狡猾で貪欲な生き物が生息します。十分、注意して着いてきてください。でないと死にますよ」

(おおつ、これはラッキーだな！トンパの才能が十分に発揮されるんじゃないか…………… なんとってトンパと同じこと考える生き物がたくさんいるってことだろ？トンパ様様だな……………。有り難く使わせ頂きますか)

1人の男性が手には、サトツソツクリな猿。そしてこの男は声を荒げて叫んだ。

「嘘だ、こいつは嘘をついている！こいつは試験官じゃあない！俺が本当の試験官だ……………！」

「ザワザワツ」

「また、めんどうなことに…」

「フツフツフツフツ」

ざわつきだす受験者。あきれれるビノール。不敵に笑うヒソカ。

多種多様にもろの思いにふける。これから始まることを想像しながら…

## ニセモノ×タタカイ×シケンカン？

「おいおい、どういうことなんだよ……」

「ぎわっぎわっ」

辺りがざわめめきでした。この事態にビノールはどうしたものかと考える

(めんどくせーなあ……。俺には、サトツが本物っていうのは分かるんだが……。それを説明するのがなあ……。)

ビノールは凝《ギョウ》を使い、2人を見ていた。

凝とは、オーラを体の一部にまとわせることをいい、ビノールは目にオーラをまということにより目では見えないものを見ていた。

隣にいるサトツは滑らかなオーラが体をまとっていたが、猿を片手に現れた男はオーラをまとうことすら出来ていなかった。

試験官になる人間が、念を使えないわけがないと考え、先程、現れた男が偽物とビノールは確信していた。

「ビュッ」

ビノールに向かってオーラをまとった何かが飛んでくるのをビノールは、反射的に気

づいた。

(ピクツ……はやいつ……なんだ?)

ビノールは、オーラを手にまとい飛んできたものを掴んだ。

「んんっ!!やるねえ君……君に投げたわけじゃなかったんだが……試験官というのは審査委員会から依頼されたハンターが無償で任務につくもの◆

我々が目指すハンターの端くれともあろうものが、あの程度の攻撃避けられないわけがないと思つて2人に向けてこのトランプを投げただけだね……ちよつと予想外なことが……でもあつちのやつは避けられなかったから君が本物つてことで……」

(何者かな彼……?この年で念を使えるなんて……興味あるねえ……)

ヒソカは試験官候補2人に向けて念を込めたトランプを投げたのだつた。しかし、サトツの隣にいたビノールがそれを防いでした。この行為により、ヒソカに目を付けられてしまったのは言うまでもない……。

ヒソカは猿を持った男は防ぐことが出来ず死んでしまったことからサトツが本物と結論付けた……。

(まずい、まずすぎる……。完全に目を付けられた……。ヒソカずつとこつち見てるし……)



「今回は400番の彼が守ってくれましたからよしとしますが、次からはいかなる理由でも私への攻撃は試験官への反逆行為とみなして即失格とします。よろしいですね？」

(にしても44番と400番の彼、どちらも念が使えるみたいですねえ…。どちらも未恐ろしい才能です…)。

「はいはい◆」

ヒソカによって殺された死体は、肉食の鳥たちが群がり、肉をはぎ取られていた。その姿は、敗者の末路を連想させ、受験者に恐怖の気持ちを駆り立てた。

「それでは、まいりましょうか…。二次試験会場へ……………」

サトツは、受験者を引き連れヌメーレ湿原へと入っていった……………

ヌメーレ湿原の中は、一段と霧が立ち込めている。

(さて、この霧の中どうするか…………… 先程見た、ヒソカの顔…………… 殺人鬼と同じ顔していやがったぜ…。ゴン達、大丈夫か？今のヒソカに近づくとやられるぞ！)

（つておい、言ったそばからヒソカが暴れだしたんだが……あまり関わりたくないな……絶《ゼツ》）

絶とは、念の基礎である四大行の1つ。その効果は、オーラや気配を完全に絶つ技術である。

「くつくつ……あつつはつはアーーア？ 君らは不合格だね……あと残っているのは2人か……」

クラピカとレオリオが残る2人であった。

（おい、どうするクラピカ？）

（奴は強い……天と地ほどの差があるかもしれない。だがやられっぱなしは御免だな……！）

（よく言ったぜクラピカ！ガマンできねえーよなあーーー）

「くそつたれえー……」

レオリオは、ヒソカ目掛けて突進する

（おいおい、なにやってんだよ……よりやダメだろ!!?なぜそこで逃げない!!?）

レオリオは、棒でヒソカを殴ろうとする。しかし、ヒソカは簡単にレオリオの攻撃を

かわし、後ろに回りこむ。そして、背後から即死レベルの攻撃をたたき込もうとする。クラピカは、この一瞬の攻防についていけない。

(ちっ、ゴンの友達だから仕方がない…… 助けてやるかあ…… レオリオの言葉を借りようだが、俺をねらった攻撃の借り返させてもらうぜ……)

ビノールは、落ちていた石を拾い、念はこめずに(絶を使っているため)全力でヒソカ目掛けて投げた。

「ドコツツツ」

「ゴン!!」

ヒソカの顔に石とルアーが直撃した……

(なんだ?、あれはゴンか…… いらんお節介だったかな?……)

ゴンはレオリオの叫び声を聞きつけてやってきた。そこでレオリオのピンチを見た。ゴンは武器である釣り竿を振り回し、ルアーをヒソカに叩きつけたのだ。

「やるねボウヤ?…… 釣り竿?おもしろい武器だね?…… ちよつと見せてよ◆」  
(隠れてるボウヤはそれ以上だけど……?)

上の空の状況で、レオリオの顔を殴りつけ、クラピカに向けトランプを投げ、そしてゴンに向け走り出し首根っこを掴んだ。

「大丈夫殺しじゃないよ◆…… 彼は合格だから?…… うん!君も合格?いいハン

ターになりなよ?」

ピピピ

「ヒソカそろそろ戻ってこいよ。どうやらもうすぐ二次会場につくみたいだぜ」

ヒソカの携帯らしきものからヒソカの仲間らしき声が聞こえる。

「お互い持つべきものは仲間だね?・・一人で戻れるかい?」

ゴンは頷く

「いいい」だ・・・」

ヒソカは、そう言い残しレオリオを担いで霧の中へ消えていった。

小さな影がそれについていくかのように同じ霧の中へ入っていった。

奇術師ヒソカ

それはゴンにとって今まで出会ったことのない奇妙で底の知れない生き物だった

怪人ビノール

それはヒソカにとって今まで出会ったことのない極上でどんな味がするか分からない

い果実だった

この2人が合間見えた時、2人の物語はどう転ぶのか誰にも分からない……

## ニジシケン×タマゴ×ネテロ

(どうやら間に合ったか……。ヒソカの後をついてきたのは正解だったなあ……。何々、本日正午二次試験スタートか……。もうすぐだな)

時間が近づくにつれて、周りの緊張が高まる。

ゴオオオオオ

試験会場の扉が開いた。中には細い女性(メンチ)と太くて大きい男性(ブハラ)がお腹を空かせて待っていた。

「二次試験は料理よ!! 美食ハンターのあたし達2人を満足させる食事を用意してちょうだい」

美食ハンター

世界中のあらゆる料理と食材を探求しさらに新たな美味の創造を目指す

「?!」

「料理?!」

まわりが、意味が分からずざわつきだす。

「まずはオレの指定する料理を作ってもらい」

「そこで合格した者だけがあたしの指定する料理を作るってわけよ」

「オレのメニューは豚の丸焼き！この森に生息する豚なら種類は自由…それは二次試験スタート!!」

試験参加者は、豚を探しに走り出した。そこでブハラはニヤリと笑った。なぜならこの森に生息する豚は1種類のみであり、しかも体長2メートルを超す世界で最も凶暴な豚だからだ。

豚達は、受験者達を踏み潰すかのように突進する。しかし、ブハラの期待とは裏腹に受験者達は豚を倒してきた。

この男ビノールも手こずることなく豚を始末し丸焼きにしていた…

(マラソンなんかよりこういう速く終わって楽なのがいいぜ！こーゆーのを待ってたんだ)

「へい!!お待ちちィ」

受験者は丸焼きにした豚をブハラに提出した。

「おーおいしそう!!」

「あらま大量なこと。テスト生なめてたわ…」

ブハラは提出された豚を平らげ、前半の1つ目の試験が終了した。提出した総勢70名が次の試験に進んだ。

「二次試験後半に進む前に貴方達にスペシャルゲストよ！上を見なさい」  
メンチはそう言い、受験者達に上を見るように強要した。

「・・・・・・・・えっ・・・・・・・・」

空を見ると大きな飛行船が飛んでおり、そこから飛び降りる人物がいたからだ…  
「何者だこのジイさん…」

「審査委員会のネテロ会長。ハンター試験の最高責任者よ」

「マジかよ、そんな大物がなんでここに…」

「このネテロ会長が二次試験後半のスペシャルゲストできてくれたのよ!!」

そうスペシャルゲストとは、ハンター協会会長ネテロのことであったのだ。

「ほっほっほ… すまないねえ、メンチくん。無理言つて見学させてもらつて」

「… いえ。お忙しい中、お越し頂き感謝します。」

あの横暴なメンチが、緊張していることに受験者達は驚いた。

「それではメンチくん、次の試験は如何するのかね？」

「ゆで卵。会長、私達をあの上まで連れていつてはもらえませんか？」

メンチは、ネテロにこの森の近くにある山に連れていくよう申し出た。

飛行船に乗り込み、山の頂上まで移動し降り立つとそこには、山を真つ二つにしたか

の様な谷が広がっていた。

「安心して下はふかい河よ。それじゃお先に！」

メンチは、そう言い残し谷から飛び降りた。

「えー……？」

驚きの声上がる。

「マフタツ山に生息するクモワシ、その卵をとりに行ったのじゃよ。クモワシは陸の獣から卵を守るため谷の間に丈夫な糸を張り卵を吊るしておるのじゃよ」

「その糸にうまく捕まり、1つだけ卵をとり岩壁をよじ登ってくる。これが試験よ」

ネテロとメンチが連携するかの様に言葉を発する。

「こんなもんマトモな神経で飛びおられるかよ!!」

半数近くの人間が、恐怖で足が止まっていた。しかし、他の半数は意気揚々と谷から飛び降りた。

（いえーい、レッツ、スカイダイビング!!?)

ビノールはこの試験をアクティビティをするかのように楽しんでいた。

「それじゃあ、市販の卵と食べ比べてみて！」

（うまい、うますぎる！口ん中がトロトロ祭りやー）



## 第二次試験後半　メンチのメニュー42名合格！

次の試験に向けて受験者達は飛行船にのり移動している。

「次の目的地へは明日の朝8時到着予定です。こちらから連絡するまで各自、自由に時間をお使いください」

（やつと休憩できる……少し休むとするか……）

「今年は何人ぐらい残ると思う？サトツさんどお？」

「そうですねえ、今年は新人《ルーキー》がいいですねえ」

「やっぱり？私番がいいと思うなあ！ハゲだけど……」

「私は断然400番ですねえ……彼はいいハンターになる……」

サトツに褒められるビノールであった。

「で、ブハラは？」

「そうだねー新人《ルーキー》じゃないけど気になったのがやつぱ44番……かな。ずっと殺気放つてたし……」

「1つ言えることは、44番と400番の彼は要注意ですね……。どちらも念を使える……」

「えーっ、400番の小さなガキも念使ったの？」

「……はい……」

試験官達の会話は続く。場所が変わってゴンとキルアとビノール。ゴンとキルアがネテロとゲームをしていた。ビノールはというと……

(おもしろそうなことやってんじゃねえか、少し観察させてもらおうとするか)

ビノールは、相変わらずゴン達に話し掛けにいかず隠れて見守っていた。

「もしそのゲームでワシに勝てたらハンターの資格をやろう。この船が次の目的地に着くまでの間に、この球をワシから奪えば勝ちじゃ……そっちはどんな攻撃も自由。ワシの方は手を出さん」

「ただとるだけでいいんだね？じゃおれからいくよ」

キルアは、舐められていると感じ最初から全力を出して球を奪いにいった。

(この歳で肢曲を嗜むとは末おそろしい子じやお……)

肢曲とは、暗殺術の1つであり無音歩行術を応用したワザである。キルアは、暗殺一家に生まれ小さい頃からワザを叩き込まれた。

しかし、キルアが全力で取りに行ってもネテロは簡単に躲してみせる。キルアが不利とみるやゴンも球を取りに掛かるが手も足もでない。

「やーめた、ギブ!!おれの負け」

「なんで?まだ時間はあるよ!!」

「無理だつて、一年中追いかけても取れっこない。いこーぜゴン」

「おれ、もうちよつとやつてくよ」

「あつそ、わかつたがんばりな!おれ先に寝るわ」

キルアは帰っていった。

「さて、おまえさんはどうするのかの?」

ネテロは、誰もいない方角を向いて言葉を発した。

「なんだ、バレてたのか……」

ビノールは、そう言いながらネテロとゴンの前に姿を現したのだった。

## ゲーム×ホンキ×カタ?

「ほっほっ… 伊達に年を食つたらんわい! 気配がなくとも見られてるといふ視線は感じるもんじゃ…」

「化け物め…」

「お主も大概じゃと思うがなあ… 今年の若いのは粒ぞろいじゃのお… さて… お主も一緒にゲームをせんかね?」

「一緒にやろうよ」

(さて、どうしたのか… あまりネテロ会長に目をつけられるのは御免だが、ハンターの頂きを見てみるのも悪くないな…)

「それでは参加させてもらつてもよろしいですか…」

「よろしくね! 一次試験では、レオリオを守ってくれてありがとうね。ネテロさんとっても強いから二人掛かりで取りにいこ!!?」

「ああ、よろしく。確かにあの会長は強い。だが、おまえは疲れすぎて。おまえは少し、休め! 俺は少し準備運動がてらあの会長と遊んでくる」

「わかった。がんばって!」

ビノールは、ゴンにその声を掛けネテロに向け足を伸ばした。ビノールはゴンに休ませる為に一人で遊ぶといったが、しかしそれは建前で本音は力試しがしたかったからである。

「なんじや、お主一人でくるのかのお…… 全力でかかってきなさい……」

「言われなくても!!?」

最初から全力でビノールは、足に念を込め地面を蹴った。その動きは地面を陥没させ、ネテロまでの距離を一気に縮めた。

(…… こやつ…… この歳で念まで使うとは、先程の子どもといい、この子といい一体どんな環境で過ごせばこうなるのかのお……。しかし、あまいわ! 足に念を込めてるのが丸見えじゃ!!?)

ネテロはビノールから手を伸びてくるのをギリギリで躲し続けた。ネテロはビノールの動きに驚きはしても焦りはしなかった。

(くそつ、本気で動いてるのに掴むことすら出来ねえ…… 仕方ない)

「武器は使ってもいいのか?」

「ああ好きにして構わんよ……」

「それじゃ、使わせてもらおうよ」

ビノールは、ズボンのポケットから父から奪った愛用のハサミを取り出した。

「それがお前さんの武器かね」

「…… ああ………」

(おまえの身体情報だけでも見させてもらおうぜ)

ビノールは、球を奪うことよりネテロの髪を切ることにシフトをチェンジした。

片手にハサミを持ったビノールは、ネテロに襲いかかるようにハサミを繰り出した。しかし、ネテロ簡単にこれを躲す。これらの攻防がしばらく続く。

(すごい、目で追うのがやつとだ…… これでおれと同じ年ぐらいなんてやつぱしビノールってすごい！)

動体視力に自信のあるゴンでさえついていくのがやつとである。ビノールの今の実力の高さを伺うことができる。

(ちっ、しかしこれは髪の毛を切るためのオトリだ！)

ビノールは球を奪うためにハサミを使い、ネテロを誘導してるかのように見せた。しかし、これは罠。ビノールの目的は、ネテロの髪を切ることである。

ネテロは、この思惑に気づかない……

ビノールは、下からネテロの顔に向けてハサミを突き上げる。ネテロはギリギリで躲す。

(……だっ！)

ビノールはネテロがギリギリで躲したことによりできた隙、そこに突き上がったハサミの向きを変え、ネテロの1つにまとめた髪へ向かう。

「ザシュツ」

「あーぶない、あぶない……髪を全部切られるとこじやった。」

数本の髪の毛が宙に舞う。その髪の毛をビノールは拾い口に含み、ネテロと距離を取った。

（年齢120歳を超えてるだ……それよりも驚くべきはなんという鍛え抜かれた肉。極限をも超えた鍛錬の結晶……俺にはわかる）

グリードアイランドでのビスケには驚かされたがそれ以上だ……そして念能力は、百式観音か……使い方は理解したがここで使えば後々厄介なことになるな……ここは、才能を使わせてもらおうとするか……）

効力は10秒といった所か。少ししかないが我慢するか……）

ビノールは、先程ネテロに気づかれた時と同じく足に念を込める。しかし、ネテロは気づかない。ビノールは、ネテロの攻防力移動の才能を飲込む髪を結晶《ドレインギフ

ト》で吸い取った。

ネテロの恐ろしく静かな念から次の動きを読むことができない。それは、ネテロ自身であつても……

(これで決める!)

ビノールは誰にも見つかることなくネテロ近づき、球を奪おうとした。しかしネテロ、直感でビノールに向けて球を投げつけた。急な攻撃にビノールは躲すことが出来ず直撃し、球は宙を舞いネテロの手のひらの上に戻った。

(吸い取った時間の効果は……もう切れたか……仕方ない)

「くそつ、降参だ……」

「ほっほっほ、まだまだ負けてられんよ!」

(本当は、結構危なかったじゃがお……)

ビノールは降参しネテロの前から去ろうとする。しかし、ゴンが声を掛ける。

「待つてよ、今度は2人がかりでいこうよ!今度は取れるかもしれない」

「……… ツ………、そうだな、2人がかりでいくか!」

その言葉を発してゴンとビノールはネテロの元へ走り出した。2人は、これから遊びに行くかのように笑顔で溢れていた。



「そろそろ終わりにするかの……」

少し汗を流したネテロと、横たわるビノールとゴンの姿があった。

次の目的地まであと少し……それまで2人は、横伏せになり身体を休ませるのであった。